

## 第20回党大会後の中国を占う前に①

今回は連載初回ということで、まずは私の簡単なプロフィールとこれまでの半生の振り返りをからませるところから始めたいと思います。勤務先の和歌山大学経済学部では過去二十数年来、奇数年の前期に現代中国経済論の講義を担当しております。さて、このように、隔年で中国経済を講義してきて悩ましく思うことの一つは、講義用テキストがその翌々年には書いてある内容が中国の現状に説明するには陳腐化してしまっ、新しいテキストを探すのに一苦労することです。それは、とくに今世紀に入ってから中国の日進月歩の著しい変化のあらわれでもあるわけで、たしかに書店に行けば現在の中国関連本がけっこうあるのは確認できますが、それでも、大学での学問としてのテキストの使用に耐えうる中国経済書は少数派だと言えます。

いま、中国の日進月歩的な変貌について述べましたが、前世紀のラスト30年間はどうだったでしょう？私が大学学部3年次に中国経済論のゼミに入ったのが1986年ですから、今から36年前で、中国では改革開放政策がすでに始まっています。そもそも私が中国に関心を抱くようになったのはちょうど50年前（1972年）の小学生時分で、折からの日中国交回復にともなう中国からのTV映像を見て、「中国の漢字で日本では見かけないものがけっこうあるのが面白い！」という関心からでした。それが翌年からのNHKのTV講座での中国語独学を始めるきっかけとなるのですが、当時の中国はまだまだ改革開放以前の毛沢東時代で、中国語講座のテキスト文には「無産階級文化大革命」やら「貧下中農」やら「工業学大慶、農業学大寨」などといった単語やスローガンが頻出していった頃になります。また、今でこそ中国のことで「かいほう」と云えば、「開放 (Kai fang)」が真っ先に頭に浮かびますが、当時は1949年の共和国（新中国）成立を意味する「解放 (Jie fang)」の方を指す時代でもありました。

こうした中国語独学はその後、中学入学から大学進学（1984年）までは受験勉強等々で中断を余儀なくされたわけですが、この空白の期間に、中国は毛沢東時代から改革開放の時代に移行していったわけですが（余談になりますが、上記の「工業学大慶、農業学大寨（工業は大慶に学べ、農業は大寨に学べ）」は、当時の中学社会科の暗記用語の一つで、高校入試でも出題されていました）。私が初めて中国の大地に足を踏み入れたのは1985年夏で、北京での語学短期留学でした。この時のわずか1カ月半の滞在期間、北京以外に上海、北戴河、西安、洛陽を列車（当時は非電化）で行き、現在の大まかな地域区分で見れば、華北、華東、西北、中部しか行っていないのですが（この地域区分だと他に、東北、華南、西南があります）、それでも中国の広大さに驚いた半面、総じて当時の日本に比べ後発的な雰囲気、街並みながら、同じ都会でも商店の品揃えに違いがあるなど、微妙に地域差を感じたものです。このことが、私の中国経済研究のなかでも、とくに地域構造分析や産業構造比較を専門としている原点になっているのかも知れません。

さて、大学の学部と院のゼミで中国経済を学び、研究した時期というのはその初中国の翌年の1986年度から1992年度までの7年間で、当時の中国の大半はすでに改革開放期に入っていたとはいえ、まだまだイデオロギー色が濃く、今でこそ当たり前前に使われている「市場経済」という用語などは中国国内では資本主義の産物として事実上タブー扱いでした。たしかに「計画と市場の有機的結合」といった表現で「市場」は使われていましたが、それ以外では「市場経済」の代わりに「商品経済」が用いられていました。

〈次号へ続く〉

**いま見過ごせない食卓の危機！**  
～農と食をつなぐもの～

話題提供者 和歌山大学 食農総合研究教育センター / 経済学部 教授 岸上 光克 氏  
日 時 2022年11月16日 水 19:00 ~ 20:30  
参加費 無料  
開催方法・申込手段など詳細についてはサテライトホームページをご覧ください。  
問合せ先 和歌山大学岸和田サテライト TEL・FAX 072-433-0875